

# 阪神間モダニズム再発信プロジェクト

## 基 本 構 想

令和 3（2021）年 3 月

阪神間モダニズム再発信プロジェクト

基 本 構 想 策 定 委 員 会



# 目次

はじめに	1
<用語の整理>	1
○阪神間とは	
○阪神間モダニズムとは	
第1章 阪神間モダニズムの文化的特質	3
(1) 「寛容な風土」の醸成	3
① 歴史的な要所	
② 活発な営み	
③ 芸術文化の幅を広げた阪神間の伝統芸能・民俗芸能	
(2) 花開く阪神間モダニズム	5
(3) 阪神間モダニズムが生んだ芸術文化	6
① 阪神間モダニズムと美術、音楽、文学、ファッション	
② 具体美術協会	
(4) 今に息づく「寛容な風土」	8
第2章 阪神間モダニズムの社会経済的特質	9
(1) 経済学的視点の導入	9
① 民間財（私的財）と公共財	
② 価値財に分類される準公共財	
③ クラブ財に分類される準公共財	
(2) クラブ財としての阪神間モダニズム	11
① 集団的革新主義による阪神間モダニズムの形成	
② 文化人や資本家に続いて流入したサラリーマン層の人々	
③ 阪神間モダニズムの形成を後押しした時代の流れ	
④ イノベーションを繰り返す阪神間	
第3章 阪神間モダニズムを再び考える ～地域創生に向けて～	15
(1) 定住人口の拡大	15
① 「住み続けたい」阪神間	
② 「移り住みたい」阪神間	
(2) 交流人口の拡大 ～「訪ね続けたい」阪神間～	16

第4章 阪神間モダニズムの再発信に向けた提言	18
(1) 阪神間モダニズムの精神を受け継ぐ場や機会の創出	18
(2) 阪神間の地域資源をいかしたストーリーづくり	19
① 舞台芸術を中心とした阪神間芸術文化回廊を構築する	
② 歴史をいかす	
③ 大型集客施設や美術館・博物館などの文化施設の集積をいかす	
④ 豊かな自然環境をいかす	
ア 浜手から感じる阪神間	
イ 山手から感じる阪神間	
ウ これからの自然環境とのふれあい	
(3) 美食を育む阪神間	24
(4) 大学などの教育機関を中心としたつながりづくり	25
① 阪神間モダニズムが息づく学園都市として	
② カレッジスポーツの聖地として	
(5) 「具体」の再発信	26
(6) ポストコロナ社会に向けた取組	26
① ワークーションのすすめ	
② 事業所の受入れの推進	
(7) デジタルアーカイブの活用	27
(8) 阪神間モダニズムの戦略性のあるPR展開	27
① 阪神間の認知度向上の必要性	
② ターゲットごとのPR戦略	
ア 若年層に向けて	
イ シニア層に向けて	
ウ マスメディアに向けて	
エ その他主体に向けて	
第5章 行政の施策展開の方向	31
(1) 行政としての基本姿勢	31
① さまざまな主体をつなぐ	
② さまざまな場所をつなぐ	
③ さまざまな契機をいかしてつなぐ	
(2) ポストコロナ社会への対応	32
おわりに	33
参考	35

## はじめに

兵庫県は、県政 150 周年の節目の時期に合わせて、兵庫が進むべき道を県民と広く共有するため、2030 年のめざす姿や新たな兵庫づくりの基本方針を内容とする「兵庫 2030 年の展望」を取りまとめた（平成 30（2018）年 10 月策定）。この「兵庫 2030 年の展望」を羅針盤として、兵庫の未来を開く先駆的な取組を平成 31（令和元、2019）年度に「リーディングプロジェクト」に設定し、10 年間をかけて推進することとしている。

これに伴い、阪神地域では 2030 年に向けた地域版リーディングプロジェクトの一つとして、「阪神間モダニズム再発信プロジェクト」を実施する。地域創生に向けた取組の一環として、阪神間モダニズムに代表される阪神間の地域資源を多様な主体により再発見し、それらを再創造する。そうすることにより、定住人口の拡大に向けて阪神間の住民の地域プライド<sup>1)</sup>の醸成につなげ「住み続けたい」、阪神間以外の地域の人々には「移り住みたい」、そして、交流人口の拡大に向けて、「訪ね続けたい」阪神間を目指す。

令和 2（2020）年度は、本プロジェクトの第一段階として「阪神間モダニズム再発信プロジェクト基本構想策定委員会」を組織し、審議を重ね、「阪神間モダニズム再発信プロジェクト基本構想」を策定する。令和 3（2021）年度以降は、本基本構想を軸とし 10 年間のプロジェクトを推進する。

### <用語の整理>

本基本構想においては、阪神間及び阪神間モダニズムを次のとおり定義する。なお、阪神間が指す地域や、阪神間モダニズムの花開いた時代については別の考え方もあるため、これらの用語は各主体が柔軟に解釈し運用する必要がある。

#### ○阪神間とは

一般的に阪神間は、大阪と神戸の間に位置する地域である。かつての律令制に基づく行政区域も踏まえて考えると、阪神間は「旧摂津国のうち兵庫県側の部分」のうち、「神戸市中西部（おおむね中央区から須磨区までの地域）」を除いた地域であると言える。なお、旧摂津国とは律令制に基づく行政区域であり、おおむね現在の大阪府北部、大阪府中部及び兵庫県南東部に存在していた地域である。



このため本基本構想における阪神間は、神戸市の東部、尼崎市、西宮市、芦屋市、伊丹市、宝塚市、川西市、三田市及び猪名川町を指すものとする。なお、兵庫県阪神南県民センター及び阪神北県民局の施策や事業の展開に当たっては、尼崎市、西宮市、芦屋市、伊丹市、宝塚市、川西市、三田市及び猪名川町の 7 市 1 町を対象地域とする。

本基本構想における阪神間地域  
（\*但し、事業展開については灘区、東灘区を除く）

地勢については、阪神間は兵庫県南東部に位置し、西から北にかけては神戸市中西部、北播磨地域及び丹波地域、東は大阪府に囲まれ、南は大阪湾に面している。六甲山系や長尾山系が連なり、南部に武庫平野（西摂平野）、北部に三田盆地が広がる。また、東部には猪名川、中央部には武庫川、西部には夙川、芦屋川などの河川が大阪湾に流れている。

これらの地域では、明治時代以降、そして高度経済成長期以降に人口が急増し、沿岸部や、六甲山系や長尾山系の山麓部で市街地が急速に拡大した。現在は、大阪や神戸に近接した成熟したまちとして多くの人々が住んでいる。六甲山麓や北摂里山に代表される豊かな自然が、人々の生活と共存する地域でもある。

### ○阪神間モダニズムとは

阪神間モダニズムとは、大正時代から昭和初期の時代までを中心に、産業活動が盛んな大阪と、世界との交易が進展する神戸との間である阪神間で、新しく生まれたライフスタイル、生活・産業、芸術文化（文学、音楽、美術、写真、演劇など）とそれに関連する学問、建築、娯楽、ファッション、スポーツ、価値観などの時代の潮流である。阪神間モダニズムは単なる西欧化ではなく、阪神間において脈々と受け継いできた日常生活のいろいろな場面に、西欧様式を取り入れ、独自に育み花開いたものである。

### (1) 「寛容な風土」の醸成

阪神間では、多様な自然環境の下、古くから人々が生活を営み、豊かな伝統芸能や民俗芸能が盛んであった。そして、阪神間がかつての畿内の一部であったことから、歴史的な要所でもあった。このように地域の内外を問わず社会的・文化的な活動や交流が活発であったこともあり、新しいもの、考え方、いろいろな文化などを受容し、織り交ぜて育てていく「寛容な風土」が養われていった。



芦屋川の大正橋と六甲山系

明治時代以降に、阪神間へ多くの人々が流入し、人口が急増した。そして、阪神間が大正時代から昭和初期の時代にかけて生み出したものの一つが阪神間モダニズムであった。阪神間で従来の暮らしに西欧様式を取り入れて阪神間モダニズムが開花したのは、阪神間が長い時間をかけて築き上げてきた「寛容な風土」が素地としてあったからである。

#### ① 歴史的な要所

阪神間は、政治、経済、文化などの先進地であるかつての畿内に属する旧摂津国の一部であり、歴史の表舞台に数多く登場するとともに、畿内への入口でもあったため時代の変わり目には大きな決戦があった。古代から中世の変わり目には「一の谷の戦い」、中世前期から後期の変わり目には「湊川の戦い」、中世後期と近世との変わり目には「織田と毛利のせめぎ合い（阪神間の伊丹の合戦、神戸の花隈の合戦、播州東端の三木の合戦）」が行われた。まさに「天下分け目の戦い」である。また、中世には90以上の城があったことから、この地域が歴史的な要所であったことが想像される。そして、近世から近代への変わり目には、神戸が開港場として選ばれ、阪神間には海外からの文化が流入した。

#### ② 活発な営み

田能遺跡（尼崎市）や加茂遺跡（川西市）のような古代遺跡が複数あることから、阪神間では古くから人々が生活を営んでいたことがわかる。

西宮神社（西宮市）、中山寺（宝塚市）、清荒神清澄寺（宝塚市）などの寺社仏閣には、精神文化的な拠り所として遠方からも人々が足を運んだ。

産業活動では、『「伊丹諸白」と「灘の生一本」下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷』が日本遺産として文化庁に認定（令和2年6月19日）された。清酒（澄み酒）発祥の地である伊丹や、伊丹から酒造りを導入した灘五郷（神戸市、西宮市）の清酒





灘五郷・西宮郷 白鷹禄水苑

また、阪神間では文楽や能楽のような伝統芸能が盛んである。中世には西宮神社(西宮市)を中心に、人形芝居を行う傀儡師(くぐつし)が住んでいた。



えびすかき(「人形芝居 えびす座」による上演の様子)

また、民俗芸能については北摂を中心に多岐にわたる地域文化が伝承され、現在も行われている。山寺の山門から本堂まで続く階段を少し上っては立ち止まることを繰り返しながら健康を祈願する念仏行事、豊作を祈って練り歩き奉納する行事、成人となったことを祝うために矢を射る儀式などもある。

このように阪神間の各地では、人々の暮らしを通じ、質的にも量的にも豊かな伝統芸能や民俗芸能が生まれ、守り継がれてきた。新しい文化と古い文化、自分たちの文化とそれ以外の文化が共存し合う過程で、阪神間は「寛容な風土」を蓄積していった。こうして大正時代を迎え、阪神間モダニズムを開花させたのである。

は、丹波杜氏(酒造りの職人を率いて丹波地方からやってくる、酒造りの責任者)などにより造られ、酒輸送専用の船(樽廻船)により下り酒として江戸へ届けられた。

中世以降には、大阪は経済の中心地として、兵庫は港町として本格的に発展した。近代に入り神戸が欧米との貿易港として世界に向けて開かれ、海外からの文化が阪神間に流入したのは前述のとおりであるが、阪神間には、大阪が育んできた大阪商人の合理的で、柔軟性のある文化も流入し、混ざり合うこととなった。かつて畿内の一部であったにもかかわらず、阪神間では新しいもの、考え方、いろいろな文化などを取り入れていく姿勢が生まれ、豊かな生活につながった。

そして、「えびすかき」を通じ、全国的にえびす信仰が広まった。こうした「人形操り」の起源となる伝説上の人物にゆかりの行事として、西宮神社境内にある百太夫社の前では、毎年1月に百太夫神社祭が行われている。また、阪神間では歌舞伎役者や文楽の技芸員、文化功労者、人間国宝などを輩出し続けるとともに、地域住民などに開かれた私立の能楽堂が建設されるなど、伝統芸能が地域住民に身近なものとして伝えられ、今でも発展し続けている。



## (2) 花開く阪神間モダニズム

大阪と神戸の間では、明治 38 (1905) 年に阪神電気鉄道、大正 9 (1920) 年に阪神急行電鉄 (現在の阪急電鉄) が運転を開始した。これら鉄道事業者は阪神間において、郊外住宅地の開発も行った。阪神間のまちづくりは、大阪・神戸間の鉄道開通が大きな要因になっている。



日本初の都市間電気鉄道として開業した  
阪神電鉄

大正時代には、大阪、尼崎、神戸などが商工業都市として著しい成長の中にあっただことも後押しとなり、郊外住宅地への需要が高まり、資産家や文化人が阪神間 (六甲山麓の南斜面など) に移り住んだ。なお、阪神間に移り住んだのは日本人だけではなく外国人もいた。例えば、大正 6 (1917) 年のロシア革命によって亡命してきた白系ロシア人が、黒海のリゾート地をイメージして芦屋や西宮の浜手に住み、それを世界に発信した。阪神間は山手

のイメージが強いが、浜手においては海岸別荘地としても発展した。

鉄道事業者や不動産事業者が、郊外での健康な生活や娯楽をキーワードに大阪など都市部からの移住を促し、日本における先駆的な郊外型住宅地が造られたことも重なって、サラリーマン層の流入など人口増加につながった。阪神間モダニズムの黎明期を築いた資産家や文化人のような一部の限られた富裕層の暮らしが、こうしたサラリーマン層などの地域住民にも広く浸透する「ポピュラー化」が起こり、阪神間モダニズムが花開くこととなった。

阪神間モダニズム時代の阪神間では、和洋折衷型の建築様式、野球場での観戦、ミュージカル・演劇のような舞台芸術の鑑賞、ホテルでの滞在、遊園地や海水浴場でのレクリエーションなど、現在の日本人の生活に根付いた暮らしを身近に感じることができた。



旧居留地周辺

そして、阪神間モダニズムをまち中で強く感じるのは建築物であろう。慶応 3 (1868) 年に神戸港が開港し、神戸旧居留地や北野町では、欧米人が居住するための住宅「異人館」が数多く建設された。阪神間でも海外からの文化の影響を受け、多数の建物が造られたが、阪神間モダニズムにゆかりの建築物と神戸にある異人館との大きな違いは、日本人が居

住するために、伝統的な建築様式と組み合わせ、和洋折衷型の建築物として築き上げたことにある。

これらを背景に、文学、音楽、美術、写真などの芸術文化分野においても、現在も受

け継がれる作品や芸術家が生み出されることとなった。

### (3) 阪神間モダニズムが生んだ芸術文化

新しさや明朗さを尊ぶ文化的風土を背景とし、多彩な芸術文化が展開した。特に阪神間モダニズムの申し子とも言える吉原治良が結成した「具体」は、その代表である。

#### ① 阪神間モダニズムと美術、音楽、文学、ファッション

阪神間が生んだ文化芸術を語る上で欠くことができないのが、具体美術協会（以下、「具体」という。）の存在である。「具体」は昭和 29（1954）年、1930 年代から前衛画家として知られていた兵庫県芦屋市在住の吉原治良（1905-1972）によって結成され、昭和 47（1972）年に吉原の急死によって解散したグループである。



かつて具体の野外展「真夏の太陽に挑むモダンアート野外実験展」が開催された芦屋川河畔の松林

メンバーのほとんどは当時 20 代、30 代の若者であり、吉原が掲げた「人のまねをするな」「誰も見たことがないものを作れ」というモットーの下、奇想天外な作品を発表した。特に昭和 30（1955）年、昭和 31（1956）年に芦屋川沿いの公園を使って開催した野外展は、参加型・体験型の作品や電気で光る作品、動く作品、松林の空間を縦横に活用した作品などが出品されたことから、同時代

の欧米を見渡しても例のない画期的で先進的な展覧会として、今日では国際的に高く評価されている。

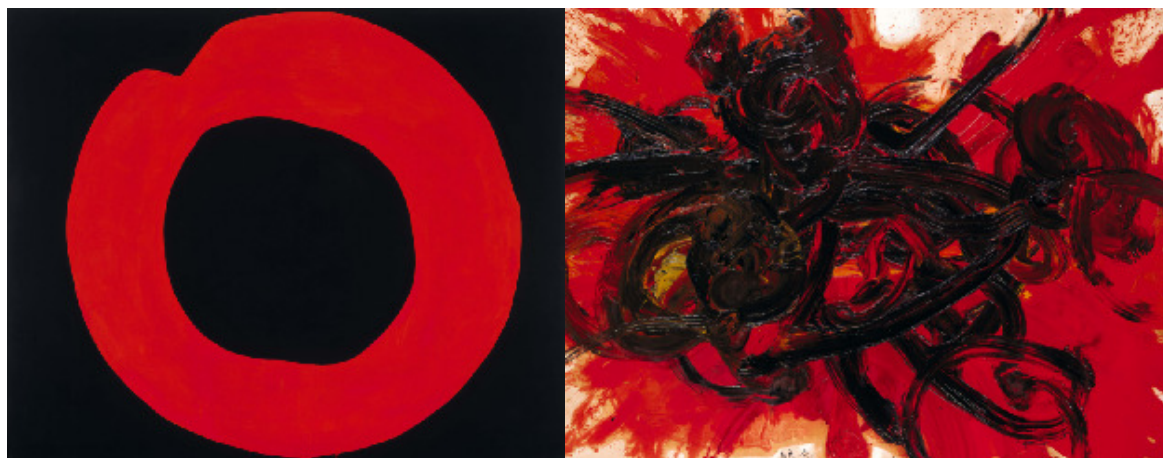
吉原が青年期を過ごした阪神間には、音楽では、外国人音楽家からクラシックを学び、後にドイツで作曲家、指揮者として活躍する貴志康一（1909-1937）、文学ではモダニズムと伝統美を融合させた耽美的作品で知られる谷崎潤一郎（1886-1965）、そして美術では藤田嗣治（1886-1968）らとパリで活動した後に、関東大震災で被災した家族と共に芦屋に移り住んだ洋画家の上山二郎（1895-1945）、当時最先端のメディアであった写真で新たな視覚的世界を開拓したハナヤ勘兵衛（1903-1991）、スイス、ドイツ、アメリカでファッション・デザインを学び、1937 年に神戸東部の本山に洋裁研究所を開設した田中千代（1906-1999）などがいた。

そのほか阪神間や神戸にゆかりの芸術家として、洋画家の小出檜重（1887-1931）、小磯良平（1903-1988）、須田剋太（1906-1990）、津高和一（1911-1995）、作曲家、指揮者の大澤壽人（1906-1953）などが挙げられる。

#### ② 具体美術協会

吉原治良は明治 38（1905）年、大阪の裕福な商家に生まれた。大事な跡取り息子であったが病弱であったため、転地療養をかねて 1920 年代半ばに芦屋に転居する。当時、阪神間では、吉原と同じく、都市化する大阪や神戸の喧噪や公害を嫌う富裕層が

邸宅を構えるようになり、欧米の近代的な建築などの生活空間やライフスタイルに強い影響を受けた阪神間モダニズムという独自の文化が開花しようとしていた。



吉原治良《黒地に赤い円》1965年  
(提供：兵庫県立美術館所蔵)

白髪一雄《作品Ⅱ》1958年  
油彩・とりの子紙  
(提供：兵庫県立美術館所蔵)

大阪時代に美術に目覚めた吉原は、新しさや明朗さを尊ぶこうした文化的風土を背景に、次第に欧米の同時代の前衛美術に関心を持つようになり、1930年代の半ばには二科会の展覧会でそれらに影響を受けた作品を次々と発表して、全国的な注目を集める。「具体」において発揮される吉原の「新しい美」「独創的な美」を見極める眼は、まさに阪神間モダニズムによって育まれたものであった。

それだけではない。吉原は、欧米の最新の美術の動向を、パリ、ロンドン、ニューヨークで刊行された最新の美術雑誌や書籍を取り寄せ研究する中で、自らの生活に根差した感覚が、実は国や人種を超え、同時代の近代都市の生活者に特有のものであること、すなわち大阪や神戸、そして阪神間が、欧米と共通の感覚で結ばれていることを実感する。阪神間モダニズムは、吉原にコスモポリタン(世界市民)としての意識、グローバルな視野をも身につけさせたのである。そして、これもまた戦後の「具体」の活動において大いに反映される。吉原が「具体」結成後まっさきに取り組んだのは、展覧会での作品発表ではなく、作品図版を豊富に収録し、日英二ヶ国語で表記された機関誌の発行であった。敗戦からまだ10年しか経たない昭和29(1954)年において、吉原の眼は世界に向けられていたのである。この「具体」の機関誌は毎回欧米に送られ、その一冊がパリにいたミシェル・タピエとの出会いをもたらす。「具体」の今日に続くヨーロッパでの評価は偶然ではなく、吉原の確信と戦略に基づいた必然であった。

吉原の阪神間モダニズムへの確信は、「具体」のメンバー選びにも表れている。吉原は自分と同じ美的感覚を、若いメンバーにも求めた。そのため「具体」の主要メンバーも、阪神間在住者が多い。例えば嶋本昭三(西宮市)、村上三郎(西宮市)、白髪一雄(尼崎市)、元永定正(西宮市、宝塚市)、山崎つる子(芦屋市)、吉田稔郎(神戸



市東灘区)、正延正俊(西宮市)、松谷武判(西宮市)などである。その他にも隣接する大阪、神戸在住者であり、18年間の活動期間を通じ、京都在住者はほとんどいなかった。「具体」が国内で有名になるにつれ、東京などからも参加希望者がいたようであるが、吉原がこの地域枠を外すことはなかった。

このように「具体」は、歴史や地域性とは無縁どころか、戦前の阪神間モダニズムの文化なくしては語れない美術グループであった。そして、吉原はじめ当時の主役たちの大半がまだ存命であり、大阪や神戸の経済力が現在ほど衰退していなかった「具体」の時代(1950年代後半から60年代)は、かつてほどの華やかさはないものの、阪神間モダニズムの文化は健在だったのである。しかし、新しさや独創性に絶対的な価値があったモダニズムの時代が終わり、宅地開発により自然が失われ、格差や貧困が社会的な問題となっている今日、阪神間から再び吉原のような美術家や「具体」のような美術グループの登場を期待することは残念ながら難しいと言える。

#### (4) 今に息づく「寛容な風土」

阪神間は、戦後に半世紀近く西宮で過ごした評論家の山崎正和が主張する「柔らかな個人主義」<sup>2)</sup>が体现された地域であると一般的に考えられている。山崎は、経済や産業が急速に拡大する産業化社会の中で生まれた旧来の個人主義は、剛直に信条を守り、変わらないことを美德にする硬い自己主張であるとした。



兵庫県立甲子園浜海浜公園(西宮市)



国道2号上にある武庫川に架かる武庫大橋(西宮市)

一方「柔らかな個人主義」は、産業化社会が一定の規模まで膨らみ、成熟した社会を迎える中で、他人に対して柔軟に振る舞いながら、自身も変化し満足するひかえめな自己主張であるとした。

新しいもの、考え方、いろいろな文化などを柔軟に取り入れ、それらを変化させて独自のものとしていく「寛容な風土」は、戦後においても脈々と続いていることが、山崎の「柔らかな個人主義」という思想から感じられる。

## 第2章 阪神間モダニズムの社会経済的特質



旧宝塚ファミリーランド (2003年3月閉園)



旧甲子園阪神パーク (2003年3月閉園)

阪神間では1990年代には、阪神・淡路大震災という未曾有の自然災害が発生した。

そして2000年代に入ると、昭和の時代から平成の時代にかけて子どもから大人までに親しまれた宝塚ファミリーランド(宝塚市)(前身は宝塚新温泉)や甲子園阪神パーク(西宮市)が閉園し、宿泊施設や阪急西宮スタジアム(西宮市)が営業を終了した。これらの跡地は、利便性の高さから住宅地や商業施設に様変わりしていった。そして現在の阪神間は、全国的な少子化、高齢化、人口減少の進行の中にある。



かつて阪神間モダニズムは、大阪、尼崎、神戸などが商工業都市として急速に変化する中で花開いた。変貌する阪神間モダニズムなどの阪神間の地域資源の再発見や再創造に向けて、ここではその社会経済的特質に着目し、分析する。

### (1) 経済学的視点の導入

文化は、優れてローカルなものである。グローバル化と情報化による「物理的な距離の死」は、「文化的な距離の死」を意味しない(エコノミスト・インテリジェントオブイス)<sup>3)</sup>。地域における「文化的結合性(cultural cohesiveness)」は、地域の中での様々な社会経済的調整や取引の費用を抑え、地域の個性を形成し、ひいては地域の魅力につながっていくものである。

ここでは、地域文化としての阪神間モダニズムを経済学的視点から整理する<sup>4)</sup>。一般

に、文化は地域のライフスタイルなどその社会や暮らしに欠かすことができない基本的な地域の公共財であることには異論がないと考えられる。また、地域の魅力を考える上で、阪神間モダニズムの地域文化が公共財として機能したことは想像に難くない。ただし、実際には、文化の有する多様性・多義性を踏まえると、民間財（私的財）と公共財の中間に位置するいささか曖昧な準公共財ということになるかもしれない。

### ① 民間財（私的財）と公共財

図1は、阪神間モダニズムを念頭に地域文化の特性を経済学的視点から位置づけようとしたものである<sup>5)</sup>。縦軸に非排除性（いったんある人に供給すれば、その人と同じ社会に住む他のすべての人々にも同時に供給することになる。）を、横軸に非競争性（ある財を複数の人々がお互いの消費する分量を削ることなく全員が同量を消費できる。）を設定している。図1において排除費用が安く、消費の競争性が高い左下には民間財（私的財）が位置している。一方、国防、司法、行政といった非排除性、非競争性が明確な公共財は右上に位置付けられている。実際にはこうした二通りの特徴を純粋な形で持っているケースは少なく、両者の中間に位置するいわゆる準公共財が今日ますますそのウェイトを増加させている。地域文化もその一つである。

### ② 価値財に分類される準公共財

図1の左上に位置する価値財は、市場取引が可能であっても、政策的見地からの供給が望ましい財・サービスを指す。価値財は「社会が公的に供給することにメリットがある」と判断した財・サービスということになるが、実際には、広義の地域メンテナンスに関わる地域に根付いた文化（サービス）を意味している。この場合、過少供給が発生する際には政府や自治体からの補助金が使われることになる。文化を地域固有の伝統を護るインフラだとすれば、それは価値財に位置づけられる。

### ③ クラブ財に分類される準公共財

一方、図1の右下に位置づけられているのはクラブ財である。クラブ財は、非競争性の点では公共財の性格を有しているが、排除原則を適用できるもの（例えばスポーツ・クラブ、有線放送など）を意味している。これは、参加には費用がかかるため制限的であるが、いったん参入すれば消費は平等という性格をもっている。社会の成熟化は人々の価値観の多元化、ニーズの多様化を加速する。こうして醸成される地域文化は、伝統的に継承されてきた地域固有の文化と関係性を有しながらも異なる様相を見せることになると考えられる。地域において、新たに創造されるコンテンツとしての文化である。こうした新たな姿をした文化の供給は、公共からではなく、基本的には市場を通じて行われ、NPOや社会企業のような非営利組織が主体となることもある。こうしてみると阪神間モダニズムの形成やその消費のあり方は、クラブ財としての地域文化の特徴を強く有しているとみてよい。



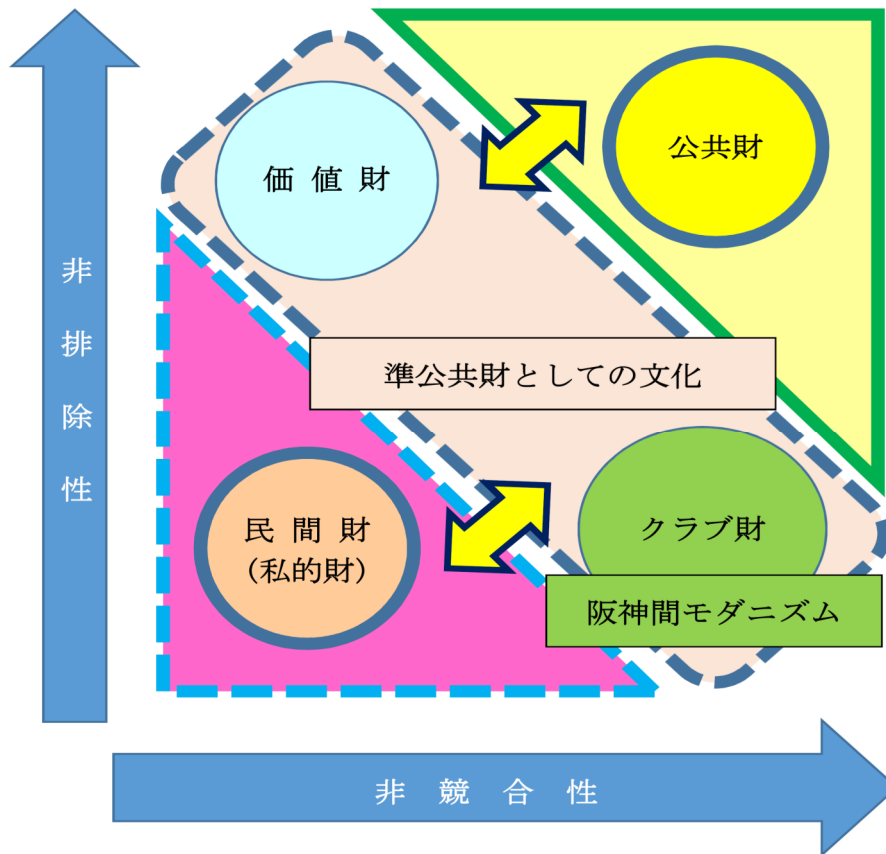


図1 文化の経済学的特質

## (2) クラブ財としての阪神間モダニズム

価値財としての文化は「変わらない地域社会」を象徴する一方、クラブ財としての文化は新たな価値を地域に見いだして創造する「変わる地域社会」を示唆するものとも言える。どちらも、地域の伝統文化として地域固有のサービスを意味している。多くの場合、そのサービスは地域内での相互的供給を主としており、地域結束を核としている。

クラブ財としての阪神間モダニズムが「日本でもっとも豊かな生活」や文化を牽引した社会経済的特質とは何なのだろうか。ここでは、河内厚郎<sup>6)</sup>らの阪神間モダニズムの形成に関わる研究蓄積をもとに社会経済的視点からの整理を行う。

### ① 集団的革新主義による阪神間モダニズムの形成

阪神間モダニズムの社会経済的特質として、まず地域文化が行動経済学でいうところの「集団的保守主義」という側面を強く有していることを挙げておきたい。「集団的保守主義」とは、いったん何らかの契機で地域に発生した地域形成への強い「意思」は、地域に内部化され、世代を超えて伝統という姿で継続的に影響を与える。価値財としての文化は、多くの場合、長い歴史の中でこれを主導する地域内の社会関係が固定され、場合によっては排他的な雰囲気をも有している。

一方、阪神間モダニズムは、もともとこうした地場の文化がないところ（あるいはそれほど強くない場所）に展開したものである。地域文化を新たに作るという「力」

がその源泉であり、その魅力に引き付けられた人々に対しオープンであることを特徴としている。先駆けとなった大阪の資産家や文化人のライフスタイルは、例えば欧米型地域文化に影響を受けた「観音林倶楽部」などに象徴されている。先駆者の有していた初期の地域形成への強い「意思」は、地域に内部化され世代をこえて影響を与えることになったとあってよい。阪神間モダニズムの進化はその出発点となる人々の影響力が堅持されると同時に、そこに新しい価値を付加する「集団的革新主義」ともいふべき文化として形成されていった。

## ② 文化人や資本家に続いて流入したサラリーマン層の人々

阪神間モダニズムの社会経済的特質の第二は、先駆者である文化人や資産家に続いて、阪神間に文化の新たな担い手が流入してきたことと関わっている。



阪神間の工業地帯

阪神間モダニズムの初期を担った文化人・資産家の先駆者としての蓄積は、もともとそうした人々とは異なるライフスタイルを持っていた多くのサラリーマン層により、新たな姿に展開していくことになる。明治時代末期、大阪や神戸は、日本を支える工業地域としての形成を本格化する時期でもあった。

日露戦争から第一次世界大戦にかけて、尼崎では臨海部を中心に旭硝子などの財閥系企業、日本で初めての外資企業である日本リーバ・ブラザーズなどが立地する。



1960年代の尼崎市の出勤風景

一方、西の神戸では、明治38(1905)年に三菱造船が浮船渠を完成させ、既に設立されていた川崎造船所とともに、明治政府の手厚い保護政策の下、飛躍的成長を遂げていた。明治42(1909)年にはダンロップ護謨のほか、バンドー化学や三ツ星ベルトのような日本のゴム工業を牽引する企業群が設立される。

こうして形成された工業地帯は、海外の進んだ技術の刺激と第一次大戦による需要増を背景に活況を呈した。

大阪と神戸という2つの成長地域を結びつけたのが、明治38(1905)年の阪神電鉄や大正9(1920)年の阪神急行電鉄(現在の阪急電鉄)の開通、昭和元(1926)年の阪神国道(現在の国道2号線)の完成であった。



阪神電車



阪急電車

交通インフラの整備によって、需要が拡大する住宅や工場用地を開発する不動産事業への資金流入を促すこととなった。当時、公害など都市問題が顕在化したこともあり、「自然豊かで温暖な阪神間」に住居を形成する動きは、鉄道会社の運営方策と一致した。このとき、阪神間に流入した人々の多くは、当時の阪神工業地帯を支えた大企業などに勤務するサラリーマン層であったと推察される。阪神間モダニズムを最初に形成した資産家や文化人のような先駆者とは異なるライフスタイルの人々は、地域の有する「価値」を巧みに自らのライフスタイルとして展開した。これは、地域文化のイノベーションである。

### ③ 阪神間モダニズムの形成を後押しした時代の流れ

阪神間モダニズムの第三の特徴は、明治末期から昭和 15（1940）年頃までの「時代」と関わっている。この時期、日本は多くの危機的事態に直面し、社会不安が蔓延する。明治 37（1904）年の日露戦争、大正 3（1914）年の第一次世界大戦、大正 12（1923）年の関東大震災、昭和 6（1931）年の満州事変、昭和 14（1939）年の第二次世界大戦など多くの社会危機が発生した。これらの事態と連動する景気の乱高下も経験した。日露戦争では軍需産業は活況を呈するが、一方で国民生活は窮乏する。その後も、銀行の倒産など日本経済は縮小することになる。



交通・環境に恵まれた開発地・西宮七園のひとつ、甲子園近辺

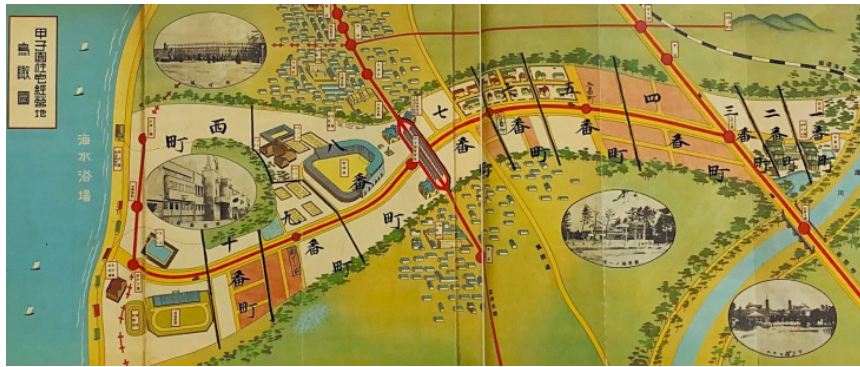
第一次世界大戦の戦時下で、経済は一時的に浮揚するものの、戦争終結とともに株式も暴落した。企業倒産や閉鎖が相次ぎ、失業や賃下げから労働争議も相次いだ。また、関東大震災という未曾有の巨大自然災害の発生なども社会不安の一因となった。金融市場で不安心理が拡大したとき、資金はより「安全」な国債市場などに流入する現象を経済学では「質への逃避」と表現する。社会不安が拡大するこの時代において、人々は保有する資



金を鉄道会社が開発する住宅地に振り向けたのだろう。こうした「質への逃避」によって阪神間の文化は一層の進化を遂げ、その姿に魅了された人々がこの地を選択するというプロセスをたどった。阪神間モダニズムは、このような「足による投票」が作り上げていったとも言える。

#### ④ イノベーションを繰り返す阪神間

阪神間モダニズムは、多くの建築物や高質な住宅地形成にとどまらず、質の高い学校や病院の設立のように、自らのライフスタイルを持続させるための地域内投資を積極的に行うという「地域のダイナミズム」を意味している。



甲子園住宅経営地鳥瞰図/昭和5年(1930)  
甲子園エリア、娯楽・スポーツ施設、学校、病院などが充実したガーデンシティの先駆けとして開発された  
(提供：阪神電気鉄道株式会社(社史より))

こうした中で、「慈善事業で社会不安は解決できない。社会を変えるには協同組合事業を通して社会貢献すべき」との信念のもと、実業家那須善治が賀川豊彦らのアドバイスを受け、「神戸購買組合」「灘購買組合」(現在の「コープこうべ」の前身)を誕生させたことに注目する必要がある。高質な住宅地と、隣接する巨大な産業空間との接点で、ライフスタイルのイノベーションを顕在化させたことで阪神間モダニズムは誕生した。「地域がビジネスを行う」という意味での協同組合の設立は、阪神・淡路大震災後、苦難に直面した被災地において展開したコミュニティ・ビジネスのルーツとも言えるかもしれない。同時期、関西学院大学学生や卒業生が核となって成長した社会ビジネスは、現在のこの分野で日本を牽引する存在にまで成長している。

こうした中で、「慈善事業で社会不安は解決できない。社会を変えるには協同組合事業を通して社会貢献すべき」との信念のもと、実業家那須善治が賀川豊彦らのアドバイスを受け、「神戸購買組合」「灘購買組合」(現在の「コープこうべ」の前身)を誕生させたことに注目する必要がある。



阪神間を代表する天井川の夙川周辺、高級住宅が建ち並ぶ(春は美しい桜の花が咲き誇る)

行政が主導する「価値財」としての文化ではなく、地域住民、事業者、関係団体などによって新たな可能性を産み出し続ける「クラブ財」としての阪神間モダニズムの精神は健在のようだ。阪神間は「戦前に作られたものを戦後食いつぶしてきたのではないか」<sup>7)</sup>との指摘もあるが、阪神間はモダニズムが開花した「繁栄した50年」から、さらなるイノベーションを繰り返しつつ現在に至っている。

国内では少子化と高齢化の進行に伴い人口減少が本格化する一方、東京には人口が集中するなど社会状況が大きく変化する中、兵庫県では地域の元気づくりや人口の社会増対策・自然増対策に向けて、平成27(2019)年度に第一期「兵庫県地域創生戦略(2015-2019)」



浜のリゾートとして栄えた鳴尾浜

を策定し、現在は第二期戦略(2020-2024)の下、取組を進めている。

阪神間においても、少子化、高齢化、人口減少のトレンドをいかに最小限に食い止め、地域の活力と人々の「こころの豊かさ」を高めていくかが喫緊の課題である。そこで、阪神間の地域創生を考えていく上で、この地域の文化的特質、社会経済的特質とも言える「阪神間モダニズム」を最大限に活用する。

#### (1) 定住人口の拡大

##### ① 「住み続けたい」阪神間

時折、マンション販売の広告で「阪神間モダニズムに住まう」といったフレーズを目にする。まさしく阪神間モダニズムには、こうした住む人のプライドをくすぐる力がある。これまで考察してきたような阪神間モダニズムの成り立ちや特性に起因する。

これからの地域づくりを考えるに当たっては、地域プライドの醸成が重要となる。地域プライドは「都市に対する市民の誇り」を指すが、都市をより広く捉え「地域」と記載したものである。これは単なるまち自慢や郷土愛ではなく、「ここをより良い場所にするために自分自身も関わっている」という当事者意識に基づく自負心のことである。これまで考察したとおり、クラブ財としての阪神間モダニズムは「変わる地



西宮市・観音山からみた甲山、周囲には住宅街が広がる

域社会」を示唆するものなので、地域住民、事業者、NPO、関係団体、アーティスト、行政などの多様な主体が連携し、再創造していくことができる。そのため、これからの阪神間の地域づくりに向けて、阪神間モダニズムに代表される阪神間の地域資源を多様な主体が再発見し、それらを再創造する過程を通じ、地域プライドの醸成につなげ、地域住民が愛着と誇りを持つ「住み続けたい」阪神間を目指し、人口の転出抑制(社会増対策)につなげる。



## ② 「移り住みたい」阪神間

阪神間の人口については、合計特殊出生率の低下などから自然減はなかなか歯止めがかかっていないものの、社会減については、高い利便性などが評価され、一部地域において年によっては社会増に転じるなど、兵庫県全体、あるいは日本全体から見ても、恵まれた環境がそろった地域であると言える。



多くの人が散歩やジョギングを楽しむ潮芦屋緑地・ビーチ

しかし、今後のさらなる人口減少を考えると、首都圏をはじめとした他地域に住む人々に対して、「阪神間に住んでみたい」と思ってもらえるような地域を目指し、人口の転入促進（社会増対策）につなげる。

## (2) 交流人口の拡大 ～「訪ね続けたい」阪神間～

阪神間は大阪や神戸からのアクセスが良く、その利便性から多くの人々が住んでいる。また、多くの商店街・商店会が地域住民に利用されていることや、ものづくり産業が盛んであることなど、産業活動が活発である。しかし、裏を返せば、観光振興によって阪神間以外の地域から多くの観光客を呼び込み、交流人口を拡大することの動機はあまり高くないかもしれない。

そのような中、世界的な新型コロナウイルス感染症の影響によってインバウンド需要は崩壊した。また、感染症の拡大防止のための外出自粛や催しの延期・中止によって、飲食、物販、芸術文化、交通、宿泊などの多岐にわたる需要が落ち込んだことで、裾野が広いとされる観光関連産業の復活とさらなる振興が強く求められるのではないだろうか。



演劇・イベント・コンサートなどが開催されるピッコロシアター  
(兵庫県立尼崎青少年創造劇場)



兵庫県阪神南県民センターでは令和2（2020）年8月に、地域振興やツーリズム振興に関する意見交換を行う「阪神南都市型ツーリズム推進協議会」を開催し、ポストコロナ社会に向けて、地域住民などが身近な地域を楽しむ域内観光「マイクロツーリズム」の可能性などについて検討している。



そこでは、阪神間は大阪、京都、神戸といった大都市から近距離にありながら、阪神間モダニズムに由来するお洒落なまち並み、スイーツ、歴史、豊かな自然環境などの三都とはひと味違う総合的な観光資源が存在する地域であるといった意見も出された。また、国内ではあまり知られていないが、世界的に評価の高い具体美術ゆかりの地域でもある。



身近に自然を楽しめる六甲山（六甲ガーデンテラス）

ポストコロナ社会を見据え、マイクロツーリズムなどによる地域振興やツーリズム振興を行うだけではなく、ワーケーション（観光地などでデジタル技術を活用し、仕事と休暇を併せて取る過ごし方）の実践地や、芸術文化などの活動拠点となるように、多様な分野での交流人口の拡大につなげ「訪ね続けたい」阪神間を目指す。



高級住宅街の中を流れる春の芦屋川

## 第4章 阪神間モダニズムの再発信に向けた提言

阪神間モダニズムに代表される阪神間の地域資源を多様な主体が再発見し、それらを再創造する際の提言を行う。



西宮浜の新西宮ヨットハーバー

阪神間モダニズムは、芸術文化、スポーツ、ファッション、ライフスタイル、リゾート、建築物、教育機関、産業活動などが個別に論じられることが多いが、これらが有機的につながり生まれたものである。しかし、提言では、阪神間モダニズムは単に過去の出来事ではなく、そこから当時の人々の精神や考え方を学び、現代の私たちに生きる指針を示すものであるとの認識の下、一見異なる分野のように思えることであっても、関連性を再

発見し、積極的に組み合わせ、再創造していく。今後、多様な主体が阪神間の地域資源をいかした取組を行う場合の参考となれば幸いである。

### (1) 阪神間モダニズムの精神を受け継ぐ機会や場の創出

文化を支える土台が阪神間モダニズムの時代とは何もかも変わってしまった中で、阪神間が目指すべきは、かつての資産家や文化人のような特権的な人々による阪神間モダニズムの文化を継承することではなく、そうした人々の遺産を活用するとともに地域住民が主役の新たな阪神間文化を再創造することである。



武庫川に架かる武庫大橋

例えば、かつての「具体」の野外展の再解釈としての阪神間の景観をいかした芸術イベントの恒例化、阪神間に残る近代建築の室内空間を使ったインスタレーション（場所全体を作品として表現すること）やパフォーマンス、貴志康一の音楽の日常レベルへの普及（阪神間の駅ベルや広場の時計の時報などへの応用）などがイメージされる。

また、そうした物理的な遺産だけではなく、阪神間モダニズムの文化の精神的な遺産を学ぶ場を持つことも重要

である。阪神間モダニズムの文化の担い手たちは、単なる流行に敏感なお金持ちではなかった。良識や品格、開かれた視野、思想、そして高い社会意識の持ち主でもあった。そこには、地域住民がこころ豊かに生きるため、また地域社会をより良く変えていくために有益な示唆がたくさん含まれているに違いない。阪神間モダニズムの文化を表層的



なイメージからではなく内実から問い直すシンポジウムの開催や、関連書籍の刊行も継続的に展開してはどうか。

## (2) 阪神間の地域資源をいかしたストーリーづくり

「住み続けたい」「移り住みたい」「訪ね続けたい」阪神間を目指すためには、地域資源を個別に発信するのではなく、いろいろなものを有機的につなげてストーリー化し、PRすることが効果的である。

また、交流人口の拡大に向けては、地域資源を体験する「コト」消費や、それらが持つ社会的・文化的な価値を共感してもらう「イミ」消費に着目しながら、身近な地域を楽しむ域内観光「マイクロツーリズム」を推進し、人々の周遊を促す。

### ① 舞台芸術を中心とした阪神間芸術文化回廊を構築する

阪神間には、舞台芸術を中心とした地域資源が一連となって集積する「文化回廊」があり、全国的にも珍しいものと言える。今後は、阪神間モダニズムに代表される阪神間の地域資源を再発見・再創造する一つの試みとして、「阪神間芸術文化回廊」を構築する。舞台芸術を中心に、阪神間の有形・無形の地域資源に関するストーリー（文化回廊）を「阪神間芸術文化回廊」として構成し、地域住民、事業者、NPO、関係団体、アーティスト、行政などの多様な主体が連携し、各種の取組や施策として活用する。

イメージとしては、文化庁の取組である「日本遺産」に近い。日本遺産は、各地域が地域の歴史的魅力や特色をストーリー化したものを文化庁が認定すれば、各地域の有形・無形のさまざまな文化財群の活用に当たって文化庁が支援を行うものである。



「灘五郷絵図」 (提供：灘五郷酒造組合)

阪神間では令和2年6月に、『「伊丹諸白」と「灘の生一本」下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷』が日本遺産として認定されたことは前述のとおりである。

阪神間では文化財群に限らずに、多岐にわたる地域資源をいかしてストーリーを創る。関連のあるストーリー同士を相互につなげていくと、阪神間として大きなストーリーが生まれる。これが「阪神間芸術文化回廊」である。ストーリー化して発信することで、地域住民や他地域の人々にとってインパクトのある分かりやすいものとなる。

「阪神間芸術文化回廊」の構築を見据え、多様な主体による各種の取組や施策を展開する。

阪神間モダニズムが大正時代から昭和初期の時代にかけて花開いた背景として、阪神間の「寛容な風土」があったことを述べた。阪神間のこの「寛容な風土」が生み出したものは、阪神間モダニズムに代表される多様な地域資源であり、その多様さに比例するように、多数の文化施設や集客施設が集積している。阪神間は、南北に流れる猪名川、武庫川などに沿ってまちが形成されていった経緯があるが、現代では、JR福知山線のうち三田と尼崎を結ぶ区間が、各地をつなぐこの役割を果たしているとも言える。



宝塚歌劇のホーム劇場、宝塚大劇場



全国野球ファンの聖地、阪神甲子園球場

舞台芸術を公演・開催できる施設を例にとっても、兵庫県立尼崎青少年創造劇場ピッコロシアター（尼崎市）、尼崎市総合文化センターあましんアルカイックホール（尼崎市）、伊丹市立音楽ホール伊丹アイフォニックホール（伊丹市）、宝塚市立文化施設ベガ・ホール（宝塚市）、宝塚大劇場・宝塚バウホール（宝塚市）、三田市総合文化センター郷の音ホール（三田市）などがある。また、前述の近松門左衛門ゆかりの施設として近松公園や近松記念館（いずれも尼崎市）があり、JR福知山線を北上すると丹波猿楽に関係のある丹波地域にも続いている。

JR福知山線の沿線のみならず、阪神間では、20以上もの私立美術館や博物館が常設展示や特設展示を通じ芸術文化、歴史などを発信しているほか、兵庫県立芸術文化センター（西宮市）など

の施設では音楽、演劇、バレエなどの舞台芸術を鑑賞できる。また、阪神甲子園球場では日常的に野球観戦を楽しむことができ、六甲山麓や北摂里山では都市の喧噪から離れて豊かな自然環境を感じることができる。

このように、舞台芸術を中心に阪神間芸術文化回廊を構築してみてもどうか。

## ② 歴史をいかす

歴史は、ただ鑑賞するだけのもので終わらせては意味がない。今のことを考えたり、未来を考えたりするときに、重要なヒントになるものが過去の中にはある。それが歴



史である。歴史を知ることは、地域住民にとっては、地域に愛着と誇りを持つことにつながる。また、地域外に住む人々には、阪神間を訪ねてもらおうきっかけとなる。

次のような取組はどうだろうか。地域住民に対しては、地域学的な講座や生涯学習の場を使って伝えていくことや、地域を専門家の解説を交えて巡る「まち歩き」や日帰りバスツアーなどを行い、歴史に触れる機会や気づきの場を創出する。身近にある歴史的な建造物の成り立ち、地名の由来など、地域ゆかりの人物など、テーマを設定し、地域住民、事業者、NPO、関係団体、アーティスト、行政などのいろいろな主体が企画し実施する。また、義務教育においては、一般的な日本の歴史のみならず、郷土の歴史を学ぶ機会を充実させる。阪神間以外の人々には、歴史をストーリー化して発信し、関心を持ってもらう。「刀剣女子」という言葉があるが、これはオンラインゲームを契機に、刀剣に注目が集まり、それら実物を各地に見に行く女性ファンのことであり、美術館や博物館での企画や、地域振興としても活用されている。この事例のように、小説やアニメーションの中で登場している阪神間の実際の場所や建物を巡るツアーや、鉄道を乗り継いで、阪神間モダニズムが花開いた大正時代から昭和初期の時代にかけての雰囲気をつかむモデルコースをつくってはどうか。



宝塚歌劇・ベルサイユのばら像

かつて都があった大阪、奈良、京都に近接していることなども手掛かりに、歴史的な文化回廊も創ることができる。

J R 福知山線沿線の舞台芸術についても、能（中世）、近松劇（近世）、宝塚歌劇（近代）、新劇（現代）のように日本の演劇史の流れをたどることができるように、歴史的な広がりも観察できる。この文化回廊の各地を通る J R 福知山線を乗り継いで、それぞれの地の異なる風景や日本の演劇史を楽しむこともできる。また、令和 7（2025）年は近松の没後 300 年の年である。本プロジェクトが 2030 年に向けた取組であるから、このような節目の年も念頭に置き、ストーリー化してはどうか。そのほか、西宮神社（西宮市）、中山寺（宝塚市）、清荒神清澄寺（宝塚市）などの寺社仏閣や、遺跡や城跡が数多く見られること、

### ③ 大型集客施設や美術館・博物館などの文化施設の集積をいかす

かつて鉄道会社を中心となって開業した大型集客施設である阪神甲子園球場（西宮市）や宝塚大劇場（宝塚市）などの大型集客施設では多くの人で賑わい、阪神間に 40 以上も立地する美術館、博物館などの文化施設は芸術文化に接する機会を提供している。これらは沿線や住宅地に溶け込む形で集積し、地域内外の人々に親しまれている。

阪神間に関係する著名人や歴史上の人物に関連する施設に着目すると、阪神間が江戸時代に輩出した劇作家（浄瑠璃・歌舞伎作家）の近松門左衛門（1653-1724）ゆかりの近松記念館（尼崎市）、俳人の高浜虚子（1874-1959）ゆかりの虚子記念文学館（芦



虚子記念文学館

作家にゆかりのある阪神間では、「文学で巡る阪神間」「漫画で巡る阪神間」などのストーリーをつくってPRしてはどうか。

屋市)、作家の谷崎潤一郎(1886-1965)にゆかりの谷崎潤一郎記念館(芦屋市)、漫画家の手塚治虫(1928-1989)ゆかりの宝塚市立手塚治虫記念館(宝塚市)などがある。芦屋市立図書館(現在の芦屋市立図書館打出分室)(芦屋市)は、国内外で多くの人々を惹き付ける作家の村上春樹(1949~)が、かつて阪神間で生活しているときに通っていたという。文学作品の舞台となり、全国的に有名な漫画家や

## ⑤ 豊かな自然環境をいかす

阪神間モダニズムが花開いた大正時代から昭和初期の時代までが終わり、戦後に阪神間から誕生した具体美術が芦屋川に隣接する松林の中で展示されたのも、阪神間が自然環境と密接に関わっていることと無関係ではないだろう。具体美術と同様、海外へ発信されている「いけばな」の小原流についても、阪神間の自然環境の影響があったと言われている。また、豊かな自然環境とそれを意識した人々の生活は、阪神間の



緑豊かな芦屋川周辺

モダニズム建築にも反映されている。自然になじむ、なごむという人間の行動が阪神間や阪神間モダニズムの形成に不可欠な要素であって、これからの阪神間の将来像を考えるときにも密接に関わるものである。これからの阪神間を考えるには、自然をいかに育み、創っていくかが重要となる。この自然は大自然ではなく、人々が創造していく自然である。これらを踏まえ、自然を楽しむ機会をつくってはどうか。

## ア 浜手から感じる阪神間

令和2(2020)年度に兵庫県阪神南県民センターでは、阪神間モダニズムに関するPR動画を作成し、動画共有サービスYouTubeで公開<sup>8)</sup>している。

そこでは、阪神間モダニズムから連想される山手のプライベート空間から一線を置いている。この紹介動画では浜手のパブリック空間であるビーチリゾートを強調しているほか、阪神間の豊かな自然環境の中でゆっくりと過ごす暮らしや、他者との交流から生まれる創造性に注目している。





### 阪神間モダニズムvol1 「100年前 芦屋・西宮は一大ビーチリゾートだった...」

ロシア革命後に音楽家や芸術家が、阪神間のビーチ近くに居を構えたことで生まれた文化などもまとめられている。

山手のプライベート空間と比較すれば、浜手には御前浜、香櫨園浜、甲子園浜などの白砂青松という言葉が似合うビーチがあり、松林が残っている。こうしたパブリック空間から、夙川、芦屋川、武庫川、猪名川などがコリドー（回廊）のように、阪神間が有する六甲山系や長尾山系につながっていく。このつながりを意識して、自然を散策する取組を行ってはどうか。

### イ 山手から感じる阪神間

神戸港が開港されて海外の文化が流入するのに伴い、六甲山ではゴルフ場、スキー場、ホテルなどが設営され、こうしたレジャー施設で楽しんだ。また、ハイキング、ピクニック、登山などを通じ、



紅葉の武田尾溪谷

自然とのふれあいを楽しんだ。六甲山、摩耶山、甲山、武田尾の溪谷など、公共交通機関が近くにあり、自然を楽しめるのは阪神間の特色の一つである。近隣の山を訪ねて阪神間モダニズムを感じてみてはどうか。

## ウ これからの自然環境とのふれあい

今般のコロナ禍において 10 代から 20 代の女性を中心に流行となったものの一つに、お洒落なピクニック「おしゃピク」がある。阪神間の浜手でくつろぐ人々の姿からは、阪神間では時代に先んじて「おしゃピク」の風景があったことが想像される。今の若者たちにとっても、被写体の見映えが良い「SNS映え」する風景が浜手をはじめ、まちなか、六甲山麓、北摂里山などに広がっている。



六甲カンツリーハウス



六甲山 ロックガーデン山歩き

おしゃれな何かを軸に、従来の楽しみ方に一工夫してみてもどうか。今後は、自然環境とのふれあいには、必ずしも現地を訪ねる必要はなくなるかもしれない。これからの時代の選択肢として、VR技術などのデジタル技術を活用し、風景や見所をインターネット上で体感するというのも考えられる。

## (3) 美食を育む阪神間

阪神間を語る上で忘れてはいけないのは「食」である。阪神間の住宅地にあるお洒落なカフェでくつろぎ、美味しいパンやスイーツを食べながら、身近に阪神間モダニズムを感じることができる。



阪神間モダニズムが花開いた大正時代から昭和初期の時代にかけて、阪神間では邸宅街ができ、リゾートホテルが建設された。「東の帝国ホテル、西の甲子園ホテル」と称された旧甲子園ホテル（現在の武庫川女子大学甲子園会館）（西宮市）では、パンとスイーツを総括するチーフとしてロシア人を迎えたという。こうして阪神間では洋菓子を楽しむライフスタイルが広がった。戦後の阪神間は「ケーキの街」として成長し、現在では地域貢献への取組などから市民文化賞を受賞するオーナーシェフもいる。このようなパンやスイーツを巡る日帰りツアーや、パティシエから学ぶ美味しいケーキの作り方といった企画を検討してはどうか。



#### (4) 大学などの教育機関を中心としたつながりづくり

阪神間には大学などの教育機関が多数集積している。そして、ウィリアム・メレル・ヴォーリズ (1880-1964) の設計による関西学院大学 (西宮市) や神戸女学院 (西宮市)、



武庫川女子大学甲子園会館 (旧 甲子園ホテル)

フランク・ロイド・ライト (1867-1959) に学んだ遠藤新 (1889-1951) が設計した武庫川女子大学甲子園会館 (旧甲子園ホテル) など、海外様式を取り入れた建築物からは阪神間モダニズムを感じることができる。大学などには多くの若者が集まり、地域の活気が生まれる。阪神間の大学などを阪神間モダニズムといったキーワードでつなぎ、一つ一つの大学はもとより、地域全体として大学を盛り上げる取組を考えてはどうか。

##### ① 阪神間モダニズムが息づく学園都市として

地域内外の学生が阪神間の大学などに関心を持ち、将来的には進学先の候補としてもらうため、阪神間の大学などが連携し、阪神間モダニズムが息づく学園都市としてのブランドを全国に発信する。阪神間の大学が連携して「阪神間モダニズムが息づく大学共同体オープンカレッジ (仮称)」といった高校生向けの入学促進イベントを開催してみてもどうか。また同様に、阪神間モダニズムが息づく学園都市をテーマに、阪神間の各大学が同時期に学園祭をし、地域、近隣府県などから若者をはじめ多くの人々を呼び込む仕組みを検討してはどうか。大学生同士が交流し、阪神間の意識を育むことにもつながるのではないか。

##### ② カレッジスポーツの聖地として

阪神間はスポーツが盛んである。全国で唯一の高校野球の聖地、阪神甲子園球場には、毎年全国から多くの高校球児や応援客を迎え入れ、賑わいを見せている。



阪神甲子園球場 (西宮市)



阪神間には多くのゴルフ場が点在する

また、阪神間が生んだリゾート・スポーツとしてゴルフがある。国内における初期のゴルフ場が六甲山で開かれ、西宮の鳴尾浜を経て川西市に移転するなど、阪神間のゴルフの歴史は長く、今でも多くの人々に親しまれている。これらは阪神間モダニズムと関連する施設であり、スポーツである。そして阪神間の大学などは、アメリカンフットボール、ラクロス、タッチフットボールなどは、カレッジスポーツとして全国に名を響かせている。高校野球の甲子園のように、全国大会、西日本大会、近畿大会など、学生の競技大会の開催は多くの交流人口を生み出す。そのため、こうした学生の大会を地域が支援する仕組みをつくってはどうか。

また、これらのスポーツを通じた阪神間モダニズムの再発信として、阪神間に在住の大学生が、地域の小学生、中学生、高校生などに対してスポーツを教えながら阪神間の大学に関心を持ってもらうための出張講義、地域住民とのスポーツ大会の開催など、地域との多様な交流を行う。阪神間モダニズムが花開き、大型集客施設でのスポーツ観戦やリゾート・スポーツが始まった阪神間であるからこそ、スポーツで地域とつながる「カレッジスポーツの聖地」を目指してはどうか。

#### (5) 「具体」の再発信

世界で高い評価を得て注目を浴び続けている「具体」は、国内はおろか、地元でも認知度が高くないのは、まさに灯台下暗しである。そのため、アメリカやフランスをはじめ、世界の人々に対して阪神間を知ってもらうために、「具体」やその精神を手掛かりとしていくのはどうか。

展覧会や専門家によるシンポジウムなどでの啓発はすでに何度も試みられているが、一般への普及という点では一定の効果しか挙げられてこなかった。そのため、特に次代を担う若い世代へのアピールを念頭に、音楽、パフォーマンス、映像などを使ったこれまでにない手法でのアピールを検討できないか。

幸い 2020 年代は、令和 6（2024）年の「具体」の結成 70 周年に加え、主要メンバーの生誕 100 周年が毎年のように続く 10 年間となる。「具体」への関心が高まる機会を逃すことはできない。

#### (6) ポストコロナ社会に向けた取組



自然豊かな北摂早山博物館周辺（宝塚市西谷）

##### ① ワークーションのすすめ

今般のコロナ禍では、働き方も問われるようになった。現在、阪神間の利便性をいかに、六甲山麓や北摂早山に代表される豊かな自然環境の中でワークーションをするために、オフィスと観光地をパッケージで阪神間の内外に向けて紹介し、観光客のみならず働き手も呼び込む。付随するストーリーとして、かつて、阪神間

モダニズムの花開いた時代には、阪神間の豊かな自然環境や健康な暮らしを求め、都市化する大阪や神戸からサラリーマン層などの働き手に移り住んで阪神間を形作ったことなど、阪神間が社会経済状況と密接につながって発展してきた歴史なども含め、大阪や神戸のような都市部に近接するワーケーションの場としてPRしてはどうか。

## ② 事業所の受入れの推進

コロナ禍において、東京などの都市部にある事業所を全国各地に移転させる動きが見受けられる。阪神間では、交通の利便性の高い都市部、六甲山系や長尾山系に代表される豊かな自然環境など、多様な環境があり、事業所の移転先として幅広いニーズに応えることができる。これらの多様な環境をPRするとともに、スムーズな移転に向けた行政サービスの提供や減税措置、民間のマッチングサービスを活用した事業所建物の円滑な確保など、多様な主体が連携して事業所の受入れを推進してはどうか。

## (7) デジタルアーカイブの活用

阪神間モダニズムに代表される阪神間の地域資源の蓄積を整理・保存し、次世代へ伝えることも重要である。前述のとおり、阪神間ではこの20年間程度で、誘客施設、スポーツ施設、宿泊施設などが姿を消していったが、これらは阪神間が生み出し育んだ貴重な地域資源である。また、こうした地域資源にゆかりの人物の活動や功績に着目することも、今の阪神間を見つめなおし、良さを再発見する機会ともなる。

VR技術などのデジタル技術を活用し、地域資源やゆかりの人物をデジタルアーカイブとしてまとめることを通じ、地域を学ぶ機会や学校教育の現場で活用する。また、デジタルアーカイブをVRミュージアムやPR動画のような形式でインターネット上に公開すれば、地域内外を問わず人々が視聴することができる。このような取組は、阪神間の住民にとっては、日常の風景に隠れた歴史を再発見するなどの機会となる。また、阪神間以外に住む人々にとっては、阪神間を訪ねるきっかけづくりとなる。



## (8) 阪神間モダニズムの戦略性のあるPR展開

### ① 阪神間の認知度向上の必要性

阪神間モダニズムの認知度は低下していると言わざるを得ない。特に、若い世代にとっては、阪神間という言葉ですら耳にしたことがないという場合も少なくない。地域住民にとっても、「阪神間モダニズムは過去の文化」として認識されていることも多い。



阪神間の大学では、阪神間から何を学ぶかを教員と学生が共に考える「阪神間文化論」という講義が開講された事例がある。阪神間モダニズムの再発見に当たっての前段階として、まずは、阪神間の認知度を向上させる必要があり、特に、若い世代に阪神間を知ってもらう取組が重要となる。

1980年代後半に始まったバブル時代と言われた頃は、「今日は阪神間で遊ぶ」という言葉は確かに存在し、「苦楽園の店を梯子する」という遊び方も確かにあった。また、「阪神間」という特定の空間を表現することは、若者たちにとっても、ローカルな意識（自分たちのまちであるという誇りや意識）を感じとることができる機会であった。また、学生が愛読していたとある女性誌を例にとっても、バブル時代には、東京と並んで「ドクモ」（読者モデル）の表紙写真の背景を阪神間が飾っていた。このように、バブル時代に阪神間に関わりのあった人々にとっては、思い出の拠り所ということも含め、今なお阪神間という言葉は生きて



いると言える。

しかし、バブル時代の次の世代や、令和時代を生きる学生にとって、前述の苦楽園のような地名を阪神間と結びつけることはなくなり、阪神間が表紙写真の背景を飾った雑誌は首位を譲った。今の若者にとっての幸せ、生き方に関する考え方、家族像は少しずつ変容している。このため、阪神間を体感していた立場から「私たちの（かつての）阪神間」を伝えようとするのではなく、阪神間を現代社会に適合するイメージとして再創造して発信し、阪神間という地域の認知度を上げることから、地域プライドの醸成は始まる。

その際のイメージ戦略で注意することは、阪神間モダニズムの黎明期を築いたのは資本家や文化人のような富裕層ではなく、そうした一部の人々にとっての暮らしが地域住民に広く浸透する「ポピュラー化」が生じ、和洋折衷の建築様式などの日本人の生活に今でも息づく暮らしが阪神間で花開いたという点を強調することである。

### ③ ターゲットごとのPR戦略

阪神間モダニズムという言葉や、その言葉が持つ地域の魅力をどのように発信すべきか。実はかなり難しいことである。これまでの章で指摘があった通り、「阪神間」という地域はどこを指すのか、「モダニズム」とはどういった文化を指すのかなどは、世代によって受け止め方に大きな開きがあることが理由である。それどころか、現代の学生など、若年層には阪神間モダニズムが認知されていない状況でもある。

こうした中で、「県民」という漠然としたターゲット設定では、PR展開はうまくいかない。そのため、内容や手段によってターゲットを変え、若年層からシニア層ま



でを網羅する。以下、具体的な発信方法を若年層向け、シニア層向け、マスメディア向け、その他主体向けの大きく4つに分けて検討する。

## ア 若年層に向けて

当世、学生など若年層への発信を考えると、動画での紹介やSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の活用は必須である。辞書のように「阪神間モダニズム」を定義づけるよりも、動画でイメージしてもらうことが効果的である。課題は、この動画をどのように見ってもらうかである。そのため、建築や美術に関心のある層が若い層を拾い上げる工夫が必要である。建築関係のブログ、サイト、SNSなどでフォロワーが多い人に働きかけるなどの取組も考えられる。

また、本策定委員会の進行と並行し、兵庫県阪神南県民センターが令和2（2020）年末、阪神間モダニズムに関するPR動画を作成し、動画共有サービスYouTubeでの配信<sup>8)</sup>を始めた。監修は、本策定委員会委員でもある三宅正弘・武庫川女子大学准教授である。①地理的環境＝阪神間モダニズムとは何かに迫るとともに、②既に少なからずファン層がいる建築を中心に光を当てている。コンパクトにまとめ、続編もいろいろなテーマを考えることができる。5回に分けて配信した今回の配信において、5回のうちどのテーマの再生回数が多いかなどの反応を踏まえ、続編のテーマを検討する。

### 1 動画配信先

YouTube「阪神間モダニズム」チャンネル

<https://www.youtube.com/watch?v=iBAQNHMnYbw&list=PLEh2BEeWk1MypcJAey0d0oVKIOMR2-vhA&index=1>

QRコード →



### 2 動画の構成

vol.1 100年前 芦屋・西宮は一大ビーチリゾートだった（2分35秒）

vol.2 海岸リゾートに集まったロシア人の音楽家たち（2分47秒）

vol.3 ライフスタイルが生み出したモダニズム建築（4分33秒）

vol.4 赤い屋根に白い砂の世界（4分31秒）

vol.5 阪神間から世界へ発信される芸術と文化（2分17秒）



さらに、スイーツなどの被写体の見映えが良い「SNS映え」が期待できる分野では、Twitter や Instagram のような SNS も展開する。名前や写真だけを先行させて謎解きのように人々の興味を引きつけて、阪神間の歴史や文化に結びつける「遊び」のような展開があっても良い。

## イ シニア層に向けて



芦屋川沿いに立つ芦屋市立ルナ・ホール（定期的に講演会や座学・イベントが行われる施設の1つ）

健康志向などの影響で、近年「まち歩き」を含むイベントは盛況だった。勉強意欲の高いシニア層は、講演会など座学も熱心に参加する。残念ながら「コロナ禍」によって現在それらは実施が難しい状況ではあるが、本プロジェクトは 2030 年に向けた約 10 年間にわたって実施するものである。こうしたイベントが再開できる状況になれば、関連施設を訪問するイベントや阪神間モダニズムに関連する連続講座を開催したい。

阪神間モダニズムに関心を寄せる者にとっては、平成 9（1997）年に県内 4 館で開かれた展覧会図録「阪神間モダニズム 六甲山麓に花開いた文化、明治末期～昭和 15 年の軌跡」<sup>9)</sup> はバイブル的存在である。しかし現在は入手困難であるうえ、「ちょっとだけ知りたい」人にとっては詳しすぎる側面もある。そうした現状を考えると、インターネットが主流であるとはいえ、ハンドブックスタイルの指南書を刊行すると、「まち歩き」などのイベントやツアーでも活用が可能である。

## ウ マスメディアに向けて

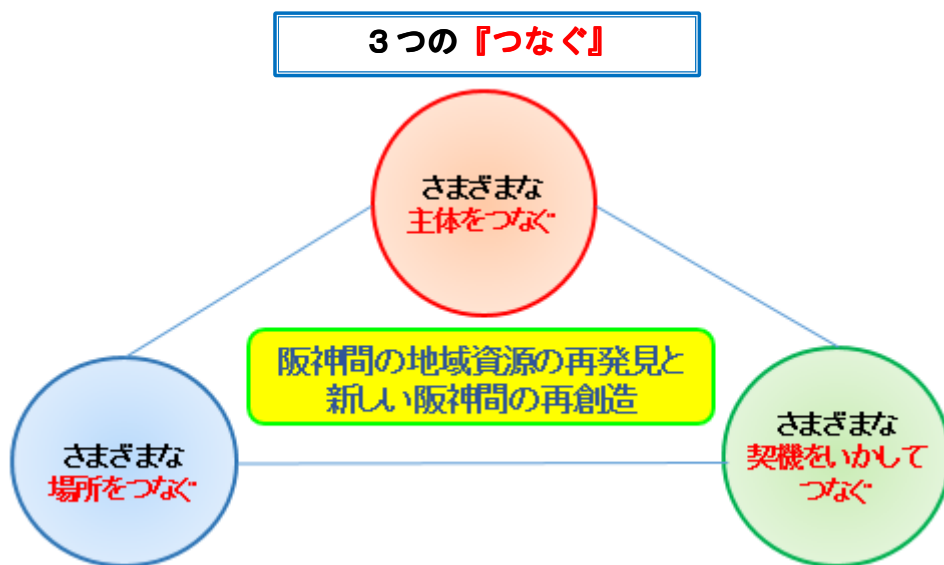
新聞やテレビのようなマスメディアに向けても、前述の紹介動画やハンドブックは有効であると考えられる。そのほか、新聞報道では企画・連載の立案の際に「節目」に着目することが多い。「結成から 70 年」「生誕から 100 年」といった阪神間モダニズムに関連する事象を広域的に兵庫県がリストアップし、講演会などの行事を告知する前段階からマスメディアに働きかけるのも一案である。

## エ その他主体に向けて

美術館や博物館、劇場、文化ホールなどの阪神間に多数存在するアメニティ施設との連携は欠かせない。各施設の催しの企画段階で、兵庫県が参加できるような働きかけを令和 3（2021）年度から始め令和 4（2022）年度以降に実施するなど、複数年度にまたがる計画的な PR 展開が求められる。

(1) 行政としての基本姿勢

行政として次の3つの基本姿勢の下、デジタル技術などを積極的に活用し、2030年に向けた施策や事業を展開する。その際、阪神間に住む人々が、何に期待し、あえて大阪や神戸ではなく阪神間を居住地に選んでいるのかを把握することで、阪神間の魅力が浮かび上がってくる。その魅力を高めるような施策や事業の展開を意識する。こうした現状やニーズの把握には、新たな予算措置を講ずるのではなく、既存の市場調査やアンケート調査などを最大限活用する。また、真に必要な施策や事業を見極め、限られた財源を効率的かつ効果的に執行できるように努める。



① さまざまな主体をつなぐ

阪神間モダニズムに代表される阪神間の地域資源を再発見・再創造する段階には、多様な主体が関与する。実際に活動する地域住民、事業者、NPO、関係団体、アーティスト、活動の成果を発信するマスメディア、それらを見る、感じる、楽しむ、参加する、購入する人々などがある。行政としては、いろいろな主体が円滑につながるための施策や事業を展開する。同時に、これらの主体が阪神間モダニズムをいかした取組、事業、経済活動などを行う場合には、本基本構想で整理した内容を積極的に活用してもらえようPRを行う。

② さまざまな場所をつなぐ

多様な主体が地域資源の再発見・再創造に取り組むとき、活動する場も多岐にわたる。芸術作品を例にとると、従来の美術館や博物館といった文化施設での展示に加え、駅の周辺、商店街などのまち全体で作品を展示する試みや、インターネット上で実際に美術館の内部を巡るように作品を鑑賞する試みも広がっている。また、SNSについても、文字、写真、動画、音声など様々な種類のサービスが登場している。今後も、



地域資源の再発見・再創造の取組の場は、一層多岐にわたることが予想される。行政としては、美術館、博物館、ホールなどの文化施設、商業施設、歴史遺産、インターネットなどの場をつなぐとともに、交通網やインターネット環境の整備を強化する。また、今後デジタル技術が一層進展することに伴い発生する情報格差（デジタル・デバイド）を防ぐことにも留意する。

### ③ さまざまな契機をいかしてつなぐ

阪神間モダニズムに代表される阪神間の地域資源に関連する節目の年に着目し、施策展開にいかす。例えば、前述の具体美術について、2020年代は令和6（2024）年の「具体」結成70周年に加え、主要メンバーの生誕100周年が毎年のように続く10年間となる。その他社会状況として本プロジェクトが目指す2030年までの期間には、東京オリンピック・パラリンピック競技大会（2021年予定）、ワールドマスターズゲームズ2021関西（2022年予定）、日本国際博覧会（大阪・関西万博、2025年予定）などの大きな行事が予定されている。また、隣接する大阪府では、統合型リゾート（IR）の立地実現に向けた取組も進められている。これら契機を確実にいかし、施策展開を行う。

## （2）ポストコロナ社会への対応

新型コロナウイルス感染症の発生は、社会経済、芸術文化、スポーツ、ツーリズムなどのあらゆる分野で大きな影響を与えている。芸術文化だけを見ても、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、各種活動や催しの従来どおりの実施が困難になるとともに、地域住民にとってはこれらに接する機会が減少することとなった。



一方、首都圏から各地への移住、マイクログローバルの増加、テレワークによる家庭や地域での自由時間の拡大など、新しい動きも起こりつつある。こうした変化する社会の中では、阪神間モダニズムのように地域が育んできた地域資源との接し方も変わってくる。

行政としては前述の基本姿勢の下、市場を通じては多くの人々に届きにくい地域の歴史、伝統芸能などの分野において、今後一層の進展が想定されるVR技術などのデジタル技術その他手法を積極的に活用し、それらを再発見・再創造する取組が求められる。また、阪神・淡路大震災や今般の新型コロナウイルス感染症のような災害における経験を、必要な教訓として収集・活用し、未来につなげていく必要がある。

## おわりに



芸術文化、伝統、自然環境などが地域住民の暮らしに欠くことができないものであることを踏まえ、阪神間モダニズムに代表される阪神間の地域資源に着目してきた。阪神間モダニズムは、地域の手でつくり上げた「変わる地域社会」を示唆していることはこれまで述べたとおりである。阪神間で育まれたこの精神を未来へ伝えていくためにも、本基本構想が示す方向性をヒントとしながら、地域住民、事業者、NPO、関係団体、アーティスト、行政などの多様な主体が、2030年の阪神間の姿を共有することが出発点となる。

この先、地域資源の再発見・再創造により現代版の阪神間モダニズムが生まれ、地域住民にとって愛着と誇りを持つ「住み続けたい」阪神間が実現されることを望む。「住み続けたい」阪神間や「訪ね続けたい」阪神間は、その先に広がっている。

## [補足・解説]

- 1) 本基本構想では、「シビックプライド」が前提とする「都市」をより広く捉え、「地域プライド」と表記した。なお、「シビックプライド」は都市に対する市民の誇りを指す用語であり、これは愛着だけでなく、都市の構成員として自分自身が関わって地域を良くしていこうとする当事者意識に基づく自負心のことを表す。
- 2) 山崎正和『柔らかな個人主義の誕生 消費社会の美学』中公文庫、1987年。
- 3) エコノミスト編集部『2050年の世界』2012年。
- 4) 文化の経済分析については、Baumol らの研究が嚆矢とあってよい。William J. Baumol and William G. Bowen, *Performing Arts The Economic Dilemma*, MIT Press, 1966 (『芸術と経済のジレンマ』池上惇他監訳、丸善、1994)。日本で最初に文化の経済的側面について検討を行ったのは梅棹である。梅棹忠夫監修『文化経済学事始め：文化施設の経済効果と自治体の施設づくり』学陽書房、1983年。
- 5) 財・サービスの特性から見た文化の検討は以下で論じた。加藤恵正「文化と地域政策」兵庫自治学第24号、4-5頁、2018年。加藤恵正「スポーツ・イベントと都市政策」兵庫県立大学地域指標研究会編『神戸マラソンの社会経済的影響』兵庫県立大学政策科学研究所研究叢書 LXXXIX、pp. 1-8、2017。
- 6) 河内厚郎『阪神間近代文学論：やわらかい個人主義の系譜』関西学院大学出版会、2015。
- 7) 『「阪神間モダニズム展」とは何か』歴史と神戸 37-4、1998年。
- 8) 令和2（2020）年度に兵庫県阪神南県民センター県民交流室が作成した。兵庫県Webページ「「阪神間モダニズム紹介動画」の配信開始について」を参照。※URLはいかのとおりに（本基本構想策定日時点）。  
<https://web.pref.hyogo.lg.jp/hsk08/2020modanismvideo.html>
- 9) 「阪神間モダニズム」展実行委員会編著『阪神間モダニズム 六甲山麓に花開いた文化、明治末期－昭和15年の軌跡』淡交社、1997年。

## [関係条例、ビジョン・戦略]

- 本基本構想の上位戦略・ビジョン
  - ・兵庫 2030年の展望（平成30年兵庫県策定）
  - ・兵庫 2030年の展望リーディングプロジェクト（令和2年に「兵庫2030年の展望」の実現に向けた取組として設定）
- 芸術文化関連
  - ・第1期芸術文化振興ビジョン（平成16年兵庫県策定）
  - ・第2期芸術文化振興ビジョン（平成27年兵庫県改定）
  - ・第3期芸術文化振興ビジョン（令和3年兵庫県策定）
- 地域創生関連
  - ・兵庫県地域創生条例（平成27年兵庫県条例第4号）
  - ・第一期「兵庫県地域創生戦略（2015-2019）」（平成27年兵庫県策定、平成30年改定）
  - ・第二期「兵庫県地域創生戦略（2020-2024）」（令和2年兵庫県策定）
- ツーリズム関連



- ・ひょうごツーリズム戦略(2020-2022年度)(令和2年公益社団法人ひょうご観光本部策定)

## 参 考

### [阪神間モダニズム再発信プロジェクト基本構想策定委員会委員]

氏 名	所 属 ・ 役 職
○加藤 恵正	兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科教授
◎河内 厚郎	文化プロデューサー
岸 桂子	毎日新聞阪神支局長
田辺 真人	園田学園女子大学名誉教授
平井 章一	関西大学文学部芸術学美術史専修教授
三宅 正弘	武庫川女子大学生活環境学部生活環境学科准教授
矢下 幸司	観光ジャーナリスト

(五十音順、委員長は◎・副委員長は○)

### [事務局]

兵庫県阪神南県民センター県民交流室

**兵庫県 阪神南県民センター 県民交流室**

〒660-8588 尼崎市東難波町 5-21-8

TEL:06-6481-7641 (代表) FAX:06-6481-8148